

## ミャオ族の歴史と文化の動態

— 中国南部山地民の想像力の変容 —

鈴木正崇

慶應義塾大学文学部教授

### 人口と分布

中国国内に居住する苗族（ミャオ族、Miaozu）は、2000 年現在、人口 894 万 116 人で、中国の少数民族としては、壮（チュアン）族（1617 万人）・満族（1068 万人）・回族（981 万人）に次ぐ四番目の人口を持つ。居住地域は、貴州省（約 420 万人）、湖南省（約 192 万人）、雲南省（約 104 万人）、重慶市（約 50 万人）、広西壮族自治区（約 46 万人）、湖北省（約 21 万人）、四川省（約 14 万人）、広東省（約 12 万人）、海南省（約 6 万人）、浙江省（約 5 万人）、江蘇省（約 2 万人）、福建省（約 2 万人）などである。全体の約半数を貴州省内の苗族が占める。苗語は漢・蔵（チベット）語族、苗・瑶（ヤオ）語派に属し、三つの方言集団に分かれ、各々の「自称」が異なっている。湖南省西部のコーション（Qo xiong）、貴州省東南部のムー（Hmub）、貴州省西部と雲南省のモン（Hmong）である。歴史上では、女性の服飾の色や文様に基づいて、黒苗・白苗・青苗・紅苗・花苗などと識別され、清代には『苗蛮図冊』などの図録が作成され、描かれた内容から当時の漢族の苗族観を知ることが出来る。地域で言えば、湖南西部（湘西）は紅苗、貴州東南部（黔東南）は黒苗、貴州西部（黔西）から雲南（文山、屏辺）にかけては花苗・白苗・青苗などと呼ばれる。黒苗もスカートの長短に合わせて長裙苗と短裙苗に分かれる。後者の自称はガノォウである。

### 生活実態

漢語表記の「苗族」は、各地の集団の自称に近い「総称」であり、民族識別によって多様な人々が「苗族」の名称のもとに組み込まれた。苗族は山岳地帯に居住しているが、地域により文化や社会のあり方は異なっている。生業形態は、山間盆地や河谷平野で水稻耕作を営む人々と、高原や山地で常畑や焼畑を営む人々に分けられる。他の民族と高度を住み分けたり、混住することも多く、実態は複雑である。かつては焼畑を生業とする人々が多く、高い移動性をもっており、15 世紀以降、山伝いに移住した結果、現在の国々でいえばラオス、ベトナム、タイにも同系統の言語や類似する文化を持つ人々が生活することになった。広域分布はかつての大規模な移住の繰り返しによって生じた。現在では、苗族は、中華人民共和国にとっては「跨境民族」であり、国境を跨って住んでいるが故に時には紛争に巻き込まれ、国際問題に発展することもある。特に、1975 年以降、ラオスの山岳地帯に住んでいたモンは、タイに逃れて難民となった。アメリカはベトナム戦争時にモンを共産党への反抗勢力として援助してきたので、ラオスでの共産党政権樹立や北ベトナムの勝利の結果、彼らは国外への脱出を図った。モンはタイなどを經由して、アメリカやフランスにわたって移民社会を形成し、現在では、海外に居住するモンは 100 万人を超えるといわれる。近年の映画『グラン・トリノ』はアメリカの蒙ンの現状を伝える。そして、アメリカなどに移住したモンは、中国の雲南や貴州の苗族と新たな関係を構築しつつある。

## 歴史の中の苗族

中国国内の苗族について考える場合、中国の古代から近代に至る歴史文献上で「苗」と記述されている人々と、1949年の中華人民共和国成立以降の1950年代に行われた民族識別によって「苗族」と認定された人々とを区別して論じる必要がある。苗族の淵源は、漢代の『書経』『舜典』に記載されている「三苗」や、『後漢書』西南夷伝の長沙「武陵蛮」に遡る説もあるが、現在の苗族との連続性を明らかにすることは難しい。「三苗」の国は揚子江南部の洞庭湖から鄱陽湖にかけての地域で戦国期の楚国にあたる地域に重なり、現在の湖南・湖北・江西にあたる。しかし、元々は、「苗」とは具体的で実体的な固有名詞ではなく、漢族が漠然と南方の非漢族に対して用いた総称で、「華夷の序」に基づいて、野蛮な人々「夷」として南方の蛮族に付けた他称であった。「苗」は漢族側からの曖昧な区分設定によって認知されてきたのであり、文字を持たない人々として蔑視され、文献では常に「華」の立場から描かれて、負の価値を背負ってきた。元々、伝統中国には異文化を認める発想はなく、天子の徳が行き渡る空間が「天下」と呼ばれて無限に広がっていたのである。中国の史書は長期に渉り南方の人々を「蛮」と表記し、現在に繋がると推定される文献上の「苗」の初出は、宋代の紹熙5年(1194)に朱子が潭州(現在の長沙)に役人として赴任した時に「苗」を「五溪蛮」の一つの「最軽捷者」とした記録(『朱子公集』巻71)である。

宋代以降は漢族の南下に伴い、揚子江流域から山岳地帯に移動し、内陸部に移住してきたと考えられるが、実態はよくわからない。明代や清代の文献には、「苗」は中国南部の非漢族を指す名称として頻繁に現れるようになった。清朝の支配者は、清代末期には、漢族の山間部への移住が進行し、土地を奪われた苗族が反乱を起こすなど大きな反発も生じた。改土帰流と称して、それまでの土地の土司を通じての間接支配を、漢族の役人である流官を通して直接に支配したことが強い反発を招いたとも言える。但し、苗族といっても内部は多様で、かつ流動性が高く統一性は乏しかったと考えられる。

## 近代における苗族の生成

1911年の辛亥革命で中華民国が成立し、清朝の領土を受け継ぐ形で多様な人々を巻き込んで近代国家へと変容し、「民族」という近代概念が導入され、民族主義や五族共和といった孫文の政治スローガンの中に組み入れられた。「苗」の名称も、南方の非漢族の総称というよりも、個別的な「民族」として認識されるように変貌した。その研究にあたって、鳥居龍蔵が行った調査(1902-03)に基づく『苗族調査』(1907)の影響は大きく、苗族という独自の文化を持つ人々がいるという認識が高まり、実体化への寄与を果たした。

1949年の中華人民共和国成立後に行われた、スターリンの「民族」の定義に基づく言語・居住地域・経済生活・心理状態という四つの指標による「民族識別」によって他者から区分され、「苗族」として認定されるに至った。しかし、あらたに「苗族」になった人々は、歴史的にみて一度も共同性をもった集団を形成したことはない。その内部には言語や生業の大きな差異があり、地域的にも広範な地域に居住し、「同胞」意識を持たなかった。ただし、「苗」の名称は南方に普及していたので、当事者にとっては「苗族」という名称による認定という事実は大きな異議を引き起こさなかった。あくまで漢族を主体とする「他者表象」の最後の仕上げが、権力側の政策としての「民族識別」であり、漢族が圧倒的に優位に立ち、強い文字の力を背景に手続きを進めた。

しかし、中国南部の非漢族の複雑な内部の状況には、識別の指標は簡単には適用できなかったのが実情で、現実には「創られた民族」として生成されたと言えるのであり、国家主導の政治的な民族生成と変化についての認識が必要である。しかし、ひとたび固定化され身分証明として表示が義務化されれば、当然、創られた民族自体が自律的な運動を始めることになる。

## 苗族の変動

大躍進や文化大革命などの政治・経済の変動期には、同化主義の傾向が強く、民族の自意識は醸成されず、民族は否定されるに至った。名実ともに「苗族」という「民族集団」(ethnic group)が生成されるのは、1978年の改革・開放以後である。「民族集団」とは、国民国家の枠組みの中で、他の同種の人々との相互作用によって文化・言語・歴史などに基づいて差異性を意識化することで作り上げられ、「我々意識」が浮かび上がる。特に80年代90年代に自らは何者であるかを強く模索することになった。「民族集団」に帰属する人々の意識の表出のあり方をエスニシティ(ethnicity 民族性)と呼ぶが、中国の少数民族でも90年代にはエスニシティやエスニック・アイデンティティの模索が顕著になったと言えよう。「民族集団」は、国民国家が前提となって成立し、自己と他者、内と外の間相互作用が絶えず行われて、民族的境界(ethnic boundary)を動的に構築し続け、変貌を遂げるのであり、「境界性」を構築しつつ流動的に変化する。ただし、中国の民族概念は国家の政策で固定化されたために、民族の内と外の差異性を巡るポリテイクスが強く顕在化したと考えられる。中国の「民族」概念は政治性を強く帯びた独自性を持つのである。1950年代から70年代に至る、漢族主導の下での非対称な「他者表象」の時代が長く続いたが、1980年代以降には苗族の「自己表象」が活発化し、「自己表象」と「他者表象」の相互作用が生じ、「他者表象」への対抗運動という多様な展開が現われてくるのである。

## 神話の再構築と現代

最近では漢族の先祖とされる黄帝と争って敗北した蚩尤を非漢族の代表と見なし、蚩尤の子孫が「三苗」であるとして、苗族の先祖を蚩尤とする説も登場したが、これは1990年代半ばに入って、漢族主体に提唱された費孝通による「中華民族の多元一体」を強調する説に対抗して現れた新たな対抗言説である。文字を持たず、口頭伝承で歴史を伝えてきた苗族にとって古代と現代を結ぶ客観的史料は存在しない。しかし、民族意識の高揚に伴い、蚩尤始祖説は定説であるかの如く語られるようになってきている。現在の村々では口頭伝承によって、先祖は江西にいたとする伝承や東方の大きな川や水辺にいたと伝えられていることが多い。その正否を論じることはできないが、苗族の祖先に当たる人々は、恐らくは古代では揚子江中・下流域に居住していた非漢族と推定される。しかし、古代の蚩尤や三苗を祖先と見なすことは不可能である。一方、現代は神話が読みかえられて現代と接合し、「我々意識」や相互の団結の原点として甦りを果たすようになった。苗族の究極の祖先を蚩尤とし、漢族の始祖の黄帝と対抗させる言説は、長年に亘って漢族によって虐げられてきた苗族が、漢族側の神話を読み変えて、共に中華民族を建設した祖先と主張をする試みに展開した。古代の神話は新たな装いをもって再構築されようとしている。